

嘆くことはない

悲しむことはない

アーナンダよ

私はずっと説いてきたではないか

すべての愛するもの

大切なものはやがて

変わり果て

離れ離れになり

消滅することは避けられないと

「——つまり私の作るウイスキーは、常に新しい味や香りを追求し、皆様に驚きと、ある意味ではショックを与えたいと考えております。ただ美味しい、香りが良い、飲みやすいといった一般的な価値観に興味はありません。手間暇をかけた自社蒸留はもちろんのこと、一部のラインナップでは日本では未発売か、とてもマイナーな蒸留所の原酒を買い付け、自社貯蔵庫で更に熟成させてからブレンドしております。一部は自前の樽に移し替えますし、時にはウイスキーにとってある種の冒瀆的な行為を行うこともあります。ウイスキーが入った樽をクレーンで吊り上げて破壊しないギリギリの高さから落下させたり、様々な木材の破片を漬け込んだり、貯蔵庫で香を炊いたり、ヘヴィメタルの音楽を大音量で鳴らしたり……。全ては皆様にウイスキーを通じた未知の体験をしていただきたいからです。当然、生産コストも大手メーカーのウイスキーとは桁違いです。大量生産もできませんので、現在の需要にお応えでできる量を生産できていない状況には、心からお詫びを申し上げます」

午後六時から始まった会見には、多くの記者とカメラマンが集まった。

三神冷面はカメラのフラッシュを浴びながら、自分の作るウイスキーを魅力的に、そしてステリアスに語った。ウイスキーなど、所詮は誰も中身を知ることのないブラックボックスだ。多くの人がウイスキーに求めるものは味や香りではない。ドラマ性と、それが

いかに希少で良い物かどうかという情報なのだ、三神は考えていた。

自分自身の見た目も重要な情報のひとつだ。サイドを短く刈り上げ、トップをオールバックにしたスリックバックの髪型。彫りの深くつきりとした顔立ち。ネクタイの完璧なデザイン。そしてイタリアまで出向いてオーダーした高級スーツ。男にも女にも好印象を与える見た目を意識した。「こんな格好良い男が、なにやら革新的なことをして作った酒は良いものに違いない」と、大衆に思わせることができれば成功だ。そして彼を取り囲む多くの記者やテレビカメラが、彼の目論見が成功したことを表していた。あのテレビカメラの先には、数多の一般大衆が自分の一言一言を注意深く聞き、次に発売するウイスキーに想いを馳せているはずだ。

今や自身の名を冠した「レイズモルト」は、発売から半年しか経っていないにもかかわらず、飛ぶ鳥を落とす勢いで知名度が加速している。まだ国内流通しか行っていないが、ワインの五大シャトーよりも投機的価値があるとメディアがこぞって煽り、人気はアジアや一部の欧米にも及び始めている。新作を発売すれば即完売。すぐに転売され、末端価格は売価の十倍以上になることも珍しくない。

そして今日の発表は、世間をさらに沸き立たせることになるだろうと三神は思っていた。「では、会見の本題に入らせていただきます」と、司会の男がよく通る声で言った。「このたび、三神が代表を務める弊社レイズは、世界的な大手製薬会社アスクレピオス様と、業務提携に向けた協議に入っております」

記者達がどよめいた。✧

司会の言う通り、アスクレピオスと言えば百年以上の歴史を持つ、ロシアに本社を置く世界的製薬会社だ。規模こそファイザーやノバルティスには及ばないが、バイオ医薬品の部類ではかなりの存在感を放っている。規模に反して株式は公開されておらず、製薬会社としては珍しい家族経営を今でも貫いている。しかし、なぜ世界的製薬会社と、人気とはいえ日本のウイスキーメーカーが提携するのかと記者達は思った。人気や知名度はさておき、酒造メーカーの企業規模は大手を除いて、いずれも中小どころか零細の域である。レイズ社ですら例外ではなく、資本金も雲泥どころの差ではない。その空気を察したのか、司会の男は軽く咳払いをしてから次の言葉に繋いだ。

「本日は、アスクレピオス様から代表として一名、この場にお越しただいております。本日のためにロシアの本社から来日いただいた、スノウ・ラスプーチナ様です。どうぞお越してください」

紹介された人物が袖から入ってくると、記者達はさらに度肝を抜かれた。

フリルの付いた真っ黒いゴシックアンドロリータの服に身を包んだ十代前半と思しき女の子が胸を張って会場に入ってきて、三神の横に並んだ。「子供？」と、カメラマンの誰かが言った。女の子は背も小さく、身体の凹凸も乏しい。綺麗な金髪を赤いリボンでツサイドアップに結んだ髪型も幼さをより強調している。ロシア人の秘書らしき男性が入ってきて、スノウの身長に合わせたマイクスタンドをセットした。その間、スノウは自信あり

げな笑みを浮かべながら、というより少し小馬鹿にしたような表情で、記者とカメラマンをゆっくりと見回した。

「スノウ・ラスプーチナです。アスクレピオスの本社では財務を担当しています。なにか質問はありますか？」

スノウはマイクがセットされるや否や、流暢な日本語で言った。わずかに首を横に傾げ、口元だけで笑っている表情はやはり小馬鹿にしているように見える。記者達は呆気に取られていた。業務提携の説明のために日本法人の男性が入ってくるのかと思いきや、生意気そうな外国人の女の子が入ってきたのだから無理もないだろう。

「なにも無いですか？」と、スノウは言った。顔からは笑みが消え、不機嫌そうな表情になっっている。

「あの……」と、前列の男性記者がおずおずと手を挙げた。スノウがどうぞと言って手を向けた。

「その格好は、ゴスロリですか？」と、指名された男性記者が言った。

スノウは「このバカはいったい何を言っているんだ？」と言いたげな表情になった。

これ？　と言いながら服の胸元を摘んで首を傾げ、不機嫌そうな顔のまま質問した記者を睨む。

「そうですね、これがなにか？　仕事と関係のある質問ですか？」

「随分とお若く見えますが、年齢はおいくつですか？　学校は？」と、すかさず別の記者

が言った。子供に問いかけるような声色だ。あからさまにスノウの眉間にシワが寄ったので、司会者が質問を遮り、業務提携に関する質問をするように促した。後方の女性記者が手を挙げた。

「失礼ですが、なぜ財務担当の方が来られたのでしょうか？ 本来はマーケティングや経営企画の担当では？」

スノウは質問を聞いて、ふんと鼻を鳴らした。やっと少しはマシな奴が出てきたかという様子で、マイクに向かって喋り始めた。

「日本企業の財務は違うのかもしれませんが、組織内の資産の動きだけではなく、将来に向けた資産配分や投資案件を検討するのも財務の重要な役割です。そしてレイズ社との提携を企画したのも、この提携の責任者も私です。先ほどから皆さんは私の服装や年齢を気にされているみたいですが、我々アスクレピオスは完全な実力主義を敷いています。性別や容姿や年齢など、我々にとっては取るに足らないものです。私が代表としてこの場に立ち、提携について話をしていても、アスクレピオスとしては何ら不思議なことではありません」

記者達はスノウの回答に顔を見合わせた。どこか小馬鹿にしたような表情は変わらないものの、堂々とした口調で経営について滑らかに話をするスノウは見た目とのギャップもあり、ある種特別なオーラを放っているように見えた。記者達は興味を引かれ、数人が同時に手を上げた。

「なぜ、ウイスキーメーカーと提携されるのでしょうか？ 製薬とウイスキーは畑違いでは？」

「まずマーケットの話を見せていただくと、ウイスキーは皆さんもご存知の通り、今後とも需要の拡大が期待できる有益な市場です。有益な市場がそこにあるのに、畑違いだからと指をくわえて見ているだけではなにも得られません。また畑違いと思われるかもしれないが、私はそうは思いません。我々は創業から百年を超える知見の積み重ねにより、人間の受ける官能を数値化することが可能です。そして、ウイスキーの持つ香りや味わいが人間の感覚器官への刺激、つまり官能である以上、我々の知見は製薬だろうが酒造だろうが、あらゆる分野で生かせると考えています。ウイスキーは今までは良くも悪くもブレが大きく、完成するまで品質がわからない、ある種偶然の産物でした。自然任せと言えば聞こえはいいのですが、愚かなほど非効率です。しかし我々アスクレピオスの技術を用いれば、レイズ社の作るウイスキーを完全にコントロールし、狙い通りの香味の実現が可能です。先ほど彼が語った新しい味や香りと言うものも、我々であればいとも簡単に、何種類でも作り出せます——」

そのような可能性もあります、と三神がスノウの話を守るように割って入った。スノウが視線の端で三神を睨む。

「お聞きの通り、アスクレピオスさんは弊社が逆立ちしても敵わない技術をお持ちです。冒頭申し上げた通り、今までに無い新しい香りや味のウイスキーを作り皆様にシヨックを

与えたいという考えでは、我々とアスクレピオスさんは意見が一致しています。しかし、まだ提携について打ち合わせは始まったばかりです。今後、良い進展を皆様にご報告できると信じております」

三神が会見を切ろうとした時、先ほど質問した女性記者が声をあげた。

「最後にすみません。スノウさんのファミリーネームについてですが、失礼ですが創業家とのご関係は？」

「……ええ、前社長は私の実の父です」と、スノウは興味なさげに言った。「十年ほど前に亡くなりましたけどね」

「困りますな……勝手に話を進められては」

記者達が引き上げた会見場で、三神が顔を歪めながらスノウに言った。苛立っているのだろう。刈り上げた側頭部をしきりに搔いている。

「話が早くていいじゃないですか。そもそも私がさっき言ったことが目的で、そちらは提携の話に乗ったのでは？」

「それはそうですが、発表には然るべきタイミングと方法というものがある。あれではまるで、そちらの指示通りにウチがウイスキーを作ると言っているようなものだ」

「事実そうじゃないですか」

「違う！ 下請けになったように聞こえたら、それこそ変な誤解を生んでしまう。ウイス



キーはブランドイメージが大事なんだ。確かに会社規模は比ぶべくもないが、話はおくまでも対等な提携で、吸収や買収ではないはずだ。今日は提携について協議を開始するという内容発表にとどめるべきだった。自己紹介して握手でもすれば、それで十分だったんだ」

「もったいつけて何の利があるんです？ ウィスキーなんて、所詮は多少の香味成分の入ったエタノールと水の混合物に過ぎないじゃないですか。そんな物に、なにをそんなに必死になつてゐるんです？」

「なんだと、と三神が声を荒げた。スノウは涼しい顔をして、不敵に微笑んでゐる。

「今のは聞き捨てなりません……。私の仕事に価値が無いと言つてゐるんですか？」

「そうは言つていません。たとえ無価値なものでも利益を生み出している以上、それには価値があります。例えばあなたの言つてゐるブランドイメージとやらがそれです」と、スノウは三神を指差しながら言つた。「繰り返しますが、大切なのは利益です。この提携はお互いの利益を最大限にすることが第一の目的であり、私にはそれが出来る。美味しいウィスキーとやらを世間に届ける目的は二の次です。それに、私は見ての通り未成年なので、提携後のウィスキーが完成しても飲む機会はどうぶん先です。成果物にありつけない以上、利益重視で動かざるを得ないことを、どうかご理解いただければ」

スノウは嘲笑するような表情で、そんなこともわからないのかという口調で一気に捲し立てた。そして指を鳴らし、背後に控えていた男性秘書からアタッシユケースを受け取る

と、三神の足元に放り投げた。

「あなたが欲しがっている『今までに無い新しい香りや味や味のウイスキー』とやらのレシピとサンプルです。とりあえず二十種類ほど作ってみました。足りなければ追加で送ります。では、今日はこれ以上話すことはありませんので」

スノウが秘書を従えて去った後、三神はしばらくブルブルと身体を震わせ、やがて演台を蹴飛ばした。派手な音を立ててマイクや水差しが床に散乱する。

「なめやがって……あのクソガキが！」

三神が倒れている演台をさらに蹴った。派手な音が広い会場に繰り返し響き渡る。司会の男は狼狽しながら、なす術なく遠くから見守るしかなかった。

「おい、豚！」

三神が怒鳴ると袖から肥満体の男が現れた。スキンヘッドに無精髭を生やし、着ているスーツはシワだらけで今にもち切れそうだ。そもそもサイズが合っていない。ジャケットは肩幅が長過ぎてひさしのように迫り出しているのに、袖が短過ぎて白いシャツのカフスが全て見えている。

「お呼びでしょうか？」と、豚と呼ばれた男が呑気な口調で言った。風体に似合わず、よく通った聞き心地のいい声だ。

「あのクソガキのことを調べろ！」

「クソガキ?」

「スノウ・ラスプーチナだ!」と言いながら、三神はもう一発演壇を蹴った。「お前も見ていただろうが! さっきここで俺をコケにして、恥をかかせたメスガキだ!」

「なんだスノウちゃんのことですか。クソガキだなんて言うから、そんな子いたかなと考えてしまいましたよ。もちろん見ていましたよ。なんたつて私の好みど真ん中の女の子です。女性記者はみんな二十歳以上のババアばかりで目が腐るかと思つていたところ。それにしても、本物は写真よりも何倍も可愛くて——」

「黙れロリコンが! さつさとあのガキを調べろ!」と叫びながら、三神が演題を蹴飛ばした。

「そんなこと言われなくても、とつくに調べていますよ。スノウちゃんは子供の頃——と言つても今でも子供ですが、スイスのボーディングスクールに短期留学した後に大学を飛び級で卒業しています。かなり優秀で、大学では化学と経営学を同時に学んでいたそうです。そして卒業と同時にアスクレピオスに入社しています」

「そんなことは知つている! いくらでもネットに書いてあるだろう。何か弱みを握れ!」

「いえ、大切なのは、なぜそこまで急いでアスクレピオスに入ったのかということですよ」と、豚は言った。「アスクレピオスは確かに世界的大企業ですが、スノウちゃんがそこまで優秀なら家業を手伝う前に色々と出来たはずですよ。たとえば他の大手企業やシンクタンク

で実績や経験を積む機会はたくさんあったでしょうし、むしろその方がアスクレピオスに戻ってからより大きな貢献が出来たはです。事実、大学在学中からスノウちゃんは様々な分野から引く手数多だったらしいですが、全て断って一分一秒を争うようにアスクレピオスに入社している。おかしいと思いませんか？　そこまで優秀な子が、なぜそのようなもつたいない選択をしたのか。帰らなければならぬ理由があったということですか。それも急いで。その理由が何なのかまではもちろんネットには書いていませんが、もしかしたら弱みになるのかもしれませんが」

三神は苦虫を噛み潰したような顔で唸りながら顎に手を当てた。豚は容姿は酷いものだが、仕事は出来る男だ。やがて三神は豚の顔を指差しながら言った。

「あのクソガキのことはそのまま調べておけ。『レイズ・バー』は今日は機材トラブルで閉店にしろ。俺の借り切りにする。壊してもいい適当な女を呼んでおけ」

豚は相変わらず呑気な口調でわかりましたと言い、小走りに会見場を出て行った。

スノウがチュッパチャップスを咥えながらビルの階段を降りると、待ち構えていたカメラマンと記者に囲まれた。

会見の時しか撮影を許可していないはずだ。

日本で雇ったボディガードが記者達を押し除け、なんとかスノウと秘書が通れるスペースを作る。スノウはカメラを睨みつけ、口に入れたばかりのチュッパチャップスをガリッ

と嘯み砕いた。

日本の印象は？

なぜゴスロリ服を着ているんですか？

服はこのブランドですか？

スノウ本人に關する質問が騒音に紛れて聞こえてきた。押し合っているカメラマン同士が接触したらしく、機材が壊れる音と怒号が響く。

スノウは難儀しながら階段下に待たせてあった車に乗り込んだ。外見は黒いロールス・ロイスに似ているが、ひと回り大きい。スノウが母国から持ち込んだアウルスという純ロシア製の高級車だ。物珍しさから、車を撮影しているカメラマンも複数いる。

運転手が後部座席を閉めると、車内はほぼ無音になった。サイドガラス越しに車内は見えない。フロントに回り込んだカメラマンを押し除けるように車は静かに走り出した。

「はあ……うっざ。ハリウッドスターの出待ちじゃあるまいし」

スノウはセンターテーブル下の収納からチュッパチャプスの箱を取り出し、ストロベリークリーム味を探し出して口に放り込んだ。後部座席に身体を投げ出すように座ると、最高級のレザーとクッションがスノウの小さな身体を包み込む。

「いかがでしたか。三神冷面は」

助手席に座っている秘書がロシア語で聞いた。スノウはうーんと言いながら斜め上を見るようにして口の中でチュッパチャプスをコロコロと転がし、しばらく考えた後に答えた。

「自信は無いのに虚栄心だけはある人間の典型って感じ。見た目や話し方で繕ってはいるけれど、少し挑発したらずぐ逆上したし。会見の冒頭であいつが喋っていた妙なウイスキーの作り方も、どこまで本当かわからないわね。レイズモルトも、おそらく大したものではないでしょう。あいつ自身と同じように」

スノウは秘書に金額はいくらかかってもいいからレイズモルトを二本手配するように依頼した。都内のバーを探せば未開封のものがあるだろう。秘書がホテルのコンシェルジュに電話をかけている間、スノウは静かに目を閉じた。車の微かな揺れの中、その頭脳は素早く回転していた。